

目次

第2部 紙の記憶 UNA MEMORIA DI CARTA

- 11. あのカポカバーナで 1
- 12. いまに素晴らしいことが起きる 37
- 13. 色白の可愛いお嬢さん 55
- 14. 三つ薔薇ホテル 84

第3部 OI NOΣTOI 帰還

- 15. わが友霧よ、ついに戻ってきたな！ 91
- 16. 風が鳴る 119
- 17. 賢明な若者 186
- 18. きみは太陽のように美しい 218

引用・図版原典一覧

訳者解説

— ロアーナの炎あるいは記憶の在処をめぐる旅

上巻目次

第1部 事故 L'INCIDENTE

1. いちばん残酷な月
2. 葉のそよぎ
3. 誰かがおまえの花を摘むだろう
4. ぼくはひとりで町をゆく

第2部 紙の記憶 UNA MEMORIA DI CARTA

5. クララベル・カウの宝物
6. 『最新版メルツィ』
7. 屋根裏部屋の8日間
8. ラジオの時代
9. けれどピッポは知らない
10. 錬金術師の塔

## 11. あのカポカバーナで

何日もぼくは礼拝堂で過ごした。夜の帳が下りると、紙の束を握り締めて下におりて行き、夜通し祖父の書斎の緑色の電灯の下でラジオを点けて(いまではそう思いこんでいた)眺めた。聴く内容と読む内容を突き合わせようとしてであった。

礼拝堂の棚には未製本だがきちんと積んで置かれたぼくの子どもの時代の新聞や漫画の絵本があった。それらは祖父のものではなく、日付は1936年にはじまり45年あたりで終わっていた。

おそらくジャンニと話しながらぼくがすでに想像していたように、祖父は昔かたぎで、ぼくにサルガーリやデュマを読んでほしいと思っていたのだ。一方でぼくは、自分が想像する権利をあらためて確保するために、祖父の管理が及ばないところにこれらを取っておいたのだ。だが印刷物のいくつかが1936年まで遡っているということは、そのころぼくはまだ学校に行っていないわけだから、もし祖父でなければほかの誰かがぼくにその『子ども新聞』を買ったのだ。もしかすると祖父と両親のあいだには対立があって、「なぜ孫にあんなくならないものを見せるのか」と言われながら、両親は自分たちも子どものころいくらか読んだことがあったから大目に見たのかもしれない。

実際、ひとつ目の印刷物の山には『子ども新聞』が何年分かあり、1936年の号には「28年」という表示がついていた——これ

はファシスト暦ではなく創刊されてからの年数だった。つまり、『子ども新聞』は20世紀初頭には存在していて子ども時代に多くの父母をわくわくさせたから、ぼくが読み聞かせてもらうのが好きだったというより、両親のほうがぼくに読み聞かせるのが好きだったのかもしれない。

いずれにせよ、「小さなコッリエーレ」(ぼくは自然にこう呼んでいた)をめくるのは、それまでの日々感じていたあの緊張をあたかも再体験するようなものだった。まったくの無関心を装いつつ「小さなコッリエーレ」はファシストの栄光と御伽噺や怪奇話的な登場人物で溢れる想像上の宇宙を話題にして、小話や、まったくもって正統ファシスト的でユーモアを欠く漫画や、いまはアメリカ発祥だと誰もが知っているコマ割りをした話をぼくに提供してくれたのだった。ひとつだけ従来と違っていたのは、もとは漫画のはずの話が、吹き出しを省くか、吹き出しを単に飾りとして採用していることだった。「小さなコッリエーレ」の話にはいずれも、真面目な語には長い説明書きが、滑稽話には童謡調の短い詩がついていた。

まあ、ボナヴェントゥーラの冒険がはじまるよ。ブランコに乗る曲芸師風のありそうもない白いズボンをはいて、毎度まったくの飛び入り参加に報酬として100万リラ(月給が1000リラのご時勢に)を受け取るのに、次の話ではまた貧乏になって新たな一攫千金を待つあの男の話は、確かに何かをぼくに訴えていた。浪費家だったのだろう、パンプーリオさんはこのうえもなく満足して、連載ごとに住まいを変えたがる。これらの話は作風や挿画家の署名からして、「チビアリ」や「デカセミ」、旅立ちの準備をするカロージェロ・ソルバーラ君や、羽毛より軽いために風に運ばれて飛んだマーティン・ムーマや、驚異的な極上ニスを発明して

登場人物に塗ることで絵に精彩を与えるものだから怒り心頭に発したオランダ・パラディーノや、不思議の国の自分の王国から引き離されて苛立ち復讐に燃える、あるランプの王様といった、過去のとりわけやっかいな登場人物にいつも占領された家をもつランビッキ教授の出来事と同じく、イタリアがオリジナルの話だと思われた。

それにしても、フェリックスや植民地の腕白小僧ビビとボボ、フォルトゥネッロ、アルチバルド、ペトロニッラ(クライスラー・ビルのインテリアの中で絵の人物が額縁から出てきたもの)が動き回る超現実的な図は、まぎれもなくアメリカ的だった。

信じがたかったのは、「小さなコッリエーレ」が、もって生まれた不幸か、山形袖章をつけイタリア統一運動期ふうの髭をはやした將軍の愚かさからか、毎回監獄入りするのろま兵士(かれはまさしくぼくのベンゴディのミニ兵士のような格好をしていた!)の冒険まで掲載していたことだった。

まったく軍人らしい勇ましきなど、のろま兵士にはなかった。それなのにかれは、グロテスクではなくむしろ叙事詩ふうの調子で、エチオピアを教化しようと戦う若きイタリア人の英雄たちを語る別の物語(「エチオピアの最後の土侯」では侵攻に抵抗するアビシニア人が「強奪者」と呼ばれた)や、全員が赤シャツを着た残酷な共和国軍兵士に対するフランコ軍に味方する「ヴィッラエルモーザの英雄」の物語と共生することを許されていた。もちろんこの「ヴィッラエルモーザの英雄」は、ファランへ主義者の側で戦うイタリア人がいる一方で、国際義勇軍で戦うイタリア人もいたと述べているのではなかった。

# CORRIERE dei PICCOLI

ABBONAMENTI: ANNO L. 100.000 - SEMESTRE L. 50.000 - TRIMESTRE L. 25.000 - QUINQUEV. L. 10.000 - QUOTIDIANO L. 1.000

Supplemento illustrato del **CORRIERE DELLA SERA** di piazza San Francesco

UFFICIO: 6-8-10-12-14-16-18-20-22-24-26-28-30-32-34-36-38-40-42-44-46-48-50-52-54-56-58-60-62-64-66-68-70-72-74-76-78-80-82-84-86-88-90-92-94-96-98-100-102-104-106-108-110-112-114-116-118-120-122-124-126-128-130-132-134-136-138-140-142-144-146-148-150-152-154-156-158-160-162-164-166-168-170-172-174-176-178-180-182-184-186-188-190-192-194-196-198-200-202-204-206-208-210-212-214-216-218-220-222-224-226-228-230-232-234-236-238-240-242-244-246-248-250-252-254-256-258-260-262-264-266-268-270-272-274-276-278-280-282-284-286-288-290-292-294-296-298-300-302-304-306-308-310-312-314-316-318-320-322-324-326-328-330-332-334-336-338-340-342-344-346-348-350-352-354-356-358-360-362-364-366-368-370-372-374-376-378-380-382-384-386-388-390-392-394-396-398-400-402-404-406-408-410-412-414-416-418-420-422-424-426-428-430-432-434-436-438-440-442-444-446-448-450-452-454-456-458-460-462-464-466-468-470-472-474-476-478-480-482-484-486-488-490-492-494-496-498-500-502-504-506-508-510-512-514-516-518-520-522-524-526-528-530-532-534-536-538-540-542-544-546-548-550-552-554-556-558-560-562-564-566-568-570-572-574-576-578-580-582-584-586-588-590-592-594-596-598-600-602-604-606-608-610-612-614-616-618-620-622-624-626-628-630-632-634-636-638-640-642-644-646-648-650-652-654-656-658-660-662-664-666-668-670-672-674-676-678-680-682-684-686-688-690-692-694-696-698-700-702-704-706-708-710-712-714-716-718-720-722-724-726-728-730-732-734-736-738-740-742-744-746-748-750-752-754-756-758-760-762-764-766-768-770-772-774-776-778-780-782-784-786-788-790-792-794-796-798-800-802-804-806-808-810-812-814-816-818-820-822-824-826-828-830-832-834-836-838-840-842-844-846-848-850-852-854-856-858-860-862-864-866-868-870-872-874-876-878-880-882-884-886-888-890-892-894-896-898-900-902-904-906-908-910-912-914-916-918-920-922-924-926-928-930-932-934-936-938-940-942-944-946-948-950-952-954-956-958-960-962-964-966-968-970-972-974-976-978-980-982-984-986-988-990-992-994-996-998-1000

PER LE INCHIESTE RIVOLGERSI ALL'AMMINISTRAZIONE DEL «CORRIERE DELLA SERA» - VIA SOLFERINO, 20 - MILANO  
 Anno XXXI - N. 42 - 15 Ottobre 1947 - Costo lire 40 il numero



1. Nella mattina del terzo settembre, il signor Sottile, assistente al sindaco, ha distribuito i vari piani.



2. La mattina seguente, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.



3. La stessa mattina, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.



4. Martedì 5, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.



5. Il giorno stesso, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.



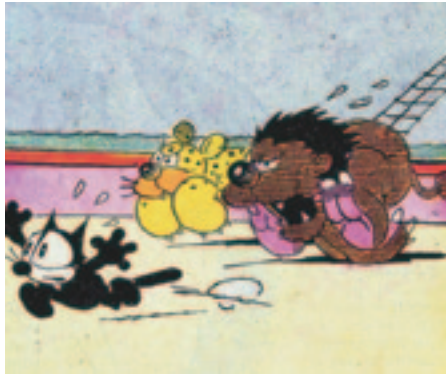
6. Il giorno stesso, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.



7. Il giorno stesso, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.



8. Il giorno stesso, il signor Sottile ha distribuito i vari piani ai gnomi.

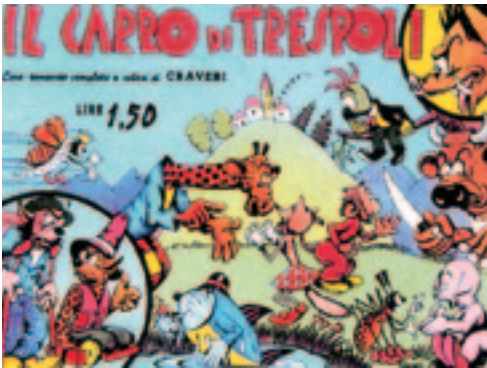


「小さなコッリエーレ」のコレクションのそばには週刊誌『勝利者』と40年以降のその大きな色刷り絵本のコレクションがあった。つまりぼくは8歳のころ漫画で〈大人の〉文学を所望したというわけだ。

分裂症がそこでも羽振りを利かせ、大キリン、四月の魚ちゃん、大ザルのジョジョらが登場する「動物園帝国」の楽しい出来事や、ピッポ、ベルティカ、パッラ、あるいはキリンを盗んで捕まった通称アロンゾのアロンゾ・アロンゾの英雄喜劇的冒険から、わが国の過去の栄光の祝福や、現行の戦争に直接発想を得た物語にまでわたっていた。

ぼくの心を大いに打ったのはレギオン兵士ローマーノの物語で、飛行機、戦車、駆逐艦、潜水艦といった戦争用の乗り物がほとんど工学的といえるほど精確だったからだ。

いまや祖父の新聞紙上で紛争を読み直すことに熟練したぼくは、日付の照合の仕方を習得していた。たとえば、「国際エネルギー局のほうへ」の話は1941年2月12日にはじまっていた。ちょうど1月にイギリス軍がエリトリアを攻撃して、2月14日にソ



マリアのモガディシオを占領するのだったが、早い話が、エチオピアはまだしっかりわが国の手にあると思われていたので、(当時リビアで戦っていた)英雄をアフリカの西部前線に移動させるのは理にかなっていた。英雄は当時アフリカ西部において軍の最高司令官であったアオスタ男爵によって極秘に派遣され、対外秘の伝言を携えて北アフリカを出発し、イギリス・エジプト領スーダンを横断したのだった。奇妙なことだ、ラジオが存在していた



し、伝言は男爵が遊びほうけていたかのように「耐えて勝て」という内容で、対外秘ではなかったことが最後に周知になるのだから。とにかく英雄ロマーノは仲間とともに出発し、未開部族やイギリスの戦車や航空機戦や、挿絵画家が光沢のある鉄板を輝かせることになったすべてのものとともにさまざまな冒険を体験したのだった。

すでにイギリス兵が広範にわたりエチオピアに侵入していた3月の号では、ただひとりそのことを知らないと思われるのがロマーノで、道を行きながらレイヨウ狩りに興じていた。4月5日アジスアベバが一扫され、イタリア兵はガッラ・シダモとアマラで戦闘態勢を取り、アオスタ男爵はアンバ・アラジに立てこもった。ロマーノは紡錘みたいにまっすぐ前進をつづけ、象狩りにまで没頭していた。おそらく本人のみならず読者も、ロマーノはそれでもアジスアベバに行かなければならないと考えていたが、アジスアベバにはもうエチオピア王ネグスが返り咲き、ちょうど5年前に権力を奪還していた。しかし、4月26日号で鉄砲の一撃がロマーノのラジオを打ち砕いたのは真実で、このことは、それ以前にかれがラジオをもっていたことしるしなのに、どうしてかれがそれらすべての状況を知らなかったのかわからない。

5月半ばに、アンバ・アラジの7000人の兵士たちは生活必需品も軍需品も底をつき降伏して、兵士たちとともにアオスタ男爵が捕らえられた。『勝利者』の読者がこのことを知らないはずはないし、少なくとも哀れなアオスタ男爵は気づいていたはずなのに、ロマーノのほうは6月7日アジスアベバで男爵に追いつき、バラのように元気で晴れ晴れと楽観的な男爵を目の当たりにする。現に男爵は伝言を読み、「もちろん我々は勝利を果たすまで抵抗するのだ」と断言する。



挿絵が何ヶ月か前に描かれていたのは明らかだが、相次いで起こる出来事を前に『勝利者』の編集部は数回分を取りやめる勇気がなかった。人びとは少年たちがもろもろの痛ましいニュースを知らずにいると考えて進んでいったのだが、おそらくそうだったのだろう。

3つ目は週刊『ミッキーマウス』の選集で、ウォルト・ディズニーの話のそばに、「潜水艦の見習い水夫」といった勇敢なパリッラ少年団の出来事を同等に掲載していた。実にぼくは、ほかでもない『ミッキーマウス』の何年間分で、イタリアとドイツが12月合衆国に戦争を宣言した1941年ごろ生じた事態の推移を明らかにできたのだった。ぼくはある時点で米軍がヒトラーのぺてんに嫌気がさして戦争に突入したと考えていたのだが、祖父の新聞を再度確かめてみると、そうではなくて、米軍に戦争を宣言し

たのはヒトラーとムッソリーニで、日本軍の助けを得て2、3ヶ月もすれば米軍を排除できるだろうと考えたのだった。ナチスあるいは黒シャツの親衛部隊をすぐさま送ってニューヨークを占領させるのはどう考えても難しかったから、その数年前にはもう漫画上では戦争が開始され、吹き出しがすがたを消して挿絵の下の説明書きに取って代わられていた。それから、ぼくがほかの子ども向けの新聞で見ることになるように、しばらく前からアメリカ人の登場人物はどこへともなく消え去りイタリア人のにせものに取りって代われ、しまい、これは最後の壁が痛ましくも陥落したと思われることだが、ミッキーマウスが殺された。ある週から次の週へいかなる前触れもなくミッキーマウスの変わらない冒険は何もなかったかのようにつづいたが、主人公はいまやあのミッキーマウスというのになり、人間であって動物ではないのに相変わらず人間の形をしたディズニーの動物たちのように手は4本指で、かれの友達はミニーではなくてミンマにピッポと呼ばれてつづいていた。ぼくは当時この世界崩壊をどのように受け止めたのだろうか。徐々にアメリカ人は悪者になっていたから、たぶんまったく平然と受け止めたのだろうか。でも当時ぼくはミッキーマウスがアメリカ生まれだと気づいていたのだろうか。読んでいる話のどんでん返しに興奮し、自分が体験している「歴史」のどんでん返しを当然とみなしているうちに、ぼくはどんでん返しの悲喜こもごもを生き抜いていたにちがいない。

ミッキーマウスのあと『冒険好き』が何年間か出て、そこからすべてが変わった。創刊号は1934年10月14日だった。

そのころ3歳に満たなかったぼくが『冒険好き』を買うはずはないし、話はまったく幼児向けではなかったから父と母がぼくに買ってくれたわけではないだろう。話がじゅうぶん展開されて

いないとはいえ、『冒険好き』は大人の読者を想定したアメリカの漫画だった。だからずっとあとになって、ほかの子ども向け新聞と交換してぼくがかき集めたものだ。だが、それから数年後にぼくが手に入れたのは、まさに色鮮やかな表紙の大判の絵本で、その中でいろんな出来事の場面が映画の「予告編」みたいに展開していた。

週刊誌や絵本がぼくの目を新しい世界へと開いてくれたのは間違いない。「世界の破壊」と題された『冒険好き』の創刊号の最初の冒険からはじめよう。ヒーローはフラッシュ・ゴードンで、かれはザーコフ博士なる人物がしでかしたごたごたのために、残酷で冷酷な、名前も身体的特徴もおそろしいばかりにアジア人的な暴君ミンに支配されたモンゴ惑星に行き着くのだった。モンゴ惑星には、宇宙の台地に伸びるクリスタルの摩天楼、海底都市、広大な森の木々に沿って広がる王国があり、登場人物はたてがみのある〈ライオン人間〉から〈ハヤブサ人間〉や〈女王ウラザの魔法使い人間〉までいて、誰もがごた混ぜ風の無頓着な服を着ており、数々のロビン・フッドみたいに、映画で描かれる中世を思い起こさせる服や、超蛮族風の胸甲やかぶとをつけているかと思えば、(宮廷では)20世紀初頭のオペレッタの胸甲騎兵か槍騎兵か竜騎兵の服の者もいた。それと同時に、善人も悪人も皆、不相応にも白い盾や矢、はたまた、稲妻光線みたいな驚異的な鉄砲を与えられ、輸送手段も、鎌つき戦車から先が針のように尖って遊園地のゴーカートみたいに鮮やかな色をした惑星間ミサイルにまでわたっていた。

ゴードンはアーリア人のヒーローらしく格好のよいブロンドだったが、かれの使命の性質はぼくを愕然とさせたにちがいない。それ以前にぼくはどんなヒーローを知っていただろう。教科書か